

語形成分析における 認知プロセスの活用

Word Formation with a Cognitive Process of Perception

青 山 千 枝 子

1. はじめに (要約)

本論では、Pustejovsky (1995) の提唱する事象構造 (Event Structure) のレベルにおいて接頭辞化の記述を試みた Aoyama (2004) の分析を基盤に、事象構造と認知文法的な語彙化のプロセスとの接点を提案することで、語形成分析において「人の語彙化における認知的な世界の捉え方」を取り入れる重要性を考察していきたい。具体的には、現在提案されている文法モデルでの語形成のメカニズム記述における問題点、語彙的な意味情報の重要性、語の意味記述のあり方について述べた後で、Pustejovsky (1995) の提案する事象構造分析の例を紹介し、接頭辞化分析への応用、知覚プロセスにおける認知的な際立ち (Cognitive Salience) との関連性を考察していく。

1. 1. 「語」はどこでどのように生成されるのか？

「語」という単位は、規則性と語彙性という二つの異なる性質を持ち合わせている。例えば、「general (一般の)」という語は接辞を付加することにより「generalize (一般化する)」、「generalization (一般化)」、「overgeneralize (過剰一般化する)」のような新たな語を規則的に創造していくことができる。

このとき、出来上がった語は部分から成る構造を持つ規則的に生成された構成物と捉えられる。しかしながら、その一方で『general (一般の)』という形容詞から『generalize (一般化する)』という動詞を派生するように、『clear (明らかな)』という形容詞に同様の接頭辞-ize を付加して『*clearize (明らかにする)』という動詞を派生することはできない」といった各語に特有と思われる規則に対する例外は多く存在しており、これら1つ1つの語が持つ例外的な情報は、『general』という語は『特殊の事例に限らず、多くの事や場合において広く認められること』という意味を持つ形容詞である」というような音声・形と意味との恣意的な結びつきと同様に、話者の間に共通する何らかの形で慣用的に記憶されていなければならない。この語が持つ慣用的な側面が語彙性であり、つまり、文法理論において語を取り扱う部門には、新たな語を規則的に生成していく動的な部分と、語に関連する特有な情報を記載しておく静的な部分という二つの性質が保持されていなければならないと考えられている。

この規則性と語彙性という、いわば矛盾するような特性を文法理論においていかに記述すべきかは非常に興味深く難解なテーマであり、『語』は文法の中でどのように扱われるべきか? という問いについては未だに明確な結論が出ていない。語は統語部門において文と同様に扱われるべきか、または語彙部門(レキシコン)という独立した部門で扱うべきかが活発な議論の対象となっているのが現状である。特に、「新たな語を規則的に作り出す語形成を文法理論においてどう記述すべきか?」という語の動的な側面については、極端に立場の異なる分析が多く提案されている。これらの分析は「文の生成同様、生産的な語形成は統語的な操作によって行なわれる」と考える統語的なレベルでの分析、「語形成は語彙的な情報の全てを司るレキシコン(心的辞書)が担当する」と考える語彙的なレベルでの分析、「語形成には、統語的な操作によって行なわれる語形成と語彙的な語形成の二種類が存在する」と考えるいわゆるモジュール形態論(影山 1993)の分析という、3つに分けて考えることができ

るだろう。

いずれの分析においても、近年重要性を増しているのが語の意味情報に関する考察である。これは、語の意味という文法モデル内に記載すべき静的な語彙情報を基に動的な語形成のメカニズムを説明しようと試みるものであり、その発端は動詞の下位範疇化研究にあるといえる。

文法全体のモデルを考えると、語の持つ語彙的な情報を何らかの形で記述する必要がある。このとき、音や意味に関連する情報と合わせて、その語特有の語彙的信息として記載しなくてはならないのが、動詞の下位範疇化に関連する情報である。

- (1) a. Mary kissed John in the garden.
b. Mary kissed John.

- (2) a. Mary put the book on the shelf.
b. *Mary put the book.

(伊藤・杉岡 2002 : 19)

kiss と put は共に動詞でありながら、(1)、(2) にみられるようにその統語的なふるまいに違いがある。動詞 kiss は (1 b) にあるように外項となる動作主以外に被動作主のみを項とする構造が可能であるが、動詞 put は同様の構造を認めない。必ず場所句の項を伴って表現することが必要となり、(2 b) は非文になってしまう。なぜ put を使用するとき場所句を伴わない文は非文となるのかを説明するためには、文法のモデル内において、何らかの形で「動詞 put は NP および PP を下位範疇化する」ということを語彙的に記載しておくことが必要になる。

チョムスキーが提案した1980年代の生成文法においては、当初この動詞の下位範疇化情報は意味的な選択制限と共に、文生成のメカニズムとは独立した

語彙部門（レキシコン）に各語彙項目ごとに記載されるとしていた。これに従うと、put の語彙項目は以下のように記述できる。

- (3) put : (Agent, Theme, Location) (s-selection 意味的な選択制限)
_ NP PP (c-selection 統語的な選択制限)

この場合、put はその意味的な情報として「外項に動作主 (Agent) を、内項に主題 (Theme) および場所 (Location) を選択する」、統語的には「NP、PPを下位範疇化する」という文構造を決定する情報が語彙的に指定される。だが、「規範的構造具現 (Canonical Structural Realization)」(Chomsky 1986) の提案により、この下位範疇化情報は語彙的に記載せずとも意味情報から得られると考えられるようになった。すなわち、「意味役割の Agent は NP、Theme は NP、Location は PP として具現化される」と一般化することで、語彙的には意味役割の情報さえ指定しておけば、「主語となる外項が NP、補部となる内項が NP、PP になる」という統語的な情報は自然と具現化されることになったのである。

この「語彙的に動詞に指定された意味役割が統語的な構造を決定する」という分析は、「語彙的な動詞の意味情報が文の基本的な構造を決定する」という語彙意味論へと発展し、近年、語形成の分析においても語の意味情報をベースにそのメカニズム記述を試みる研究が活発となっている。その代表的な分析が語の意味的な情報を語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) で記述するいわゆるLCS分析である。LCS分析では、上記の put は以下のような語彙概念構造を持つと記述される。

- (3) put : [[x ACT-ON y] CAUSE [BECOME [y BEAT [_{Loc} IN/ON z]]]]]

(伊藤・杉岡 2002 : 19)

この場合、put はその語彙概念構造の記述により『動作主 x が被動作主 y に働きかける』という上位事象が、『被動作主 y が場所 z にある』という下位事象（結果状態）をもたらす」という語彙的な意味を指定される。put の下位範疇化情報は語彙的に指定する必要がなく、この語彙概念構造から導き出すことができる。(3) の語彙概念構造上には動作主 x、被動作主 y、場所 z という 3 つの意味的な項が存在しており、これらの項が統語構造における項へと具現化するのである。つまり、語彙概念構造という語彙的に指定された意味情報が、項構造というレベルを通して統語構造へと投射され、文の基本的な構造を決定すると考えられる。これに従うと、動詞 kiss が場所句を必須の項として必要としないのは、語彙概念構造上における結果状態の語彙的な意味記述が put と異なり、場所を表す項ではなく [KISSED] (キスされた状態) という意味的な定項であるからだと分析できる。

(4) kiss : [[x ACT-ON y] CAUSE [BECOME [y BEAT [STATE KISSED]]]]]]

この語彙概念構造を用いた分析が興味深いのは、語の意味表示を部分から成る構造を持つ構成物として記述したことにある。語の意味は固定的な情報ではなく、規則的に生成された 1 つの複合的な概念なのである。この「語の意味は、意味的な構成要素を組み立てることで複合的に構成されている」という考え方をを用いると、語形成もまた「新たな語を作ること」、つまり「新たな意味を作ること」と捉えることができ、意味のレベルでは通常の語と同様の 1 つの意味生成のプロセスであると考えることができる。もちろん形態的な表現に違いはあるが、意味のレベルにおける語形成のメカニズムは基本的な語の意味表示におけるメカニズムと共通していると分析でき、語形成によって生じる統語構造上の変化も、新たに生成された意味の変化によってもたらされたものと考えることができるのである。

このような意味表示レベルでの語形成分析は、語彙概念構造を用いる分析以

外にも数多く提案されている。どのような構造表示を用いて語の意味情報を記述するか、その意味表示を全体的な文法モデルにおいてどのレベル（統語的・語彙的）で扱うかについては各分析により提案が異なるものの、「規則的な構造を持つ語彙的な動詞の意味情報が文の基本構造を決定する上で重要な役割を果たしている」点が共通する前提となっていることは間違いない。つまり、語形成のメカニズムを記述するためには、語の意味が持つ規則的な構造を明らかにすることが必要不可欠であるといえる。ここで重要になるのが、「語の意味をどのように構造化し、どのように記述するか」という点である。

1. 2. 認知主義的な「語」の意味

「語の意味をどのように構造化し、どのように記述するか」という問いは、言い換えると「人はどのように現実の世界を語彙化するのか」という問いになるだろう。人が作り出す語の意味は、単純にその語が指している「自然界に存在する客観的な事実」とは言いがたい。むしろ、時に自然界の客観的な事実とは異なる「人間が抽出した心的な記号である概念」が語の意味である。これは認知言語学や理論言語学の多くの分野における一般的な語の意味の捉え方であり、その例としてよく取り上げられるのが心的走査（Mental Scanning）や主観的移動（Subjective Motion）と呼ばれる言語事実である。

(5) The highway runs from Tokyo to Osaka.

（高速道路は東京から大阪まで走っている。）

（河上 1996：15）

(5) の例において、高速道路は実際に移動しているわけではない。客観的な現実としては、「東京と大阪の間を結ぶ高速道路が存在している」という動きのない静的な状態を描写しているに過ぎない。しかし、人間は心的にはそれを動

きのある表現として捉え、移動に対応する表現を使用している。つまり、この例における run という語の意味は必ずしも客観的な現実に対応するわけではなく、人の心の中にある主観的な現実に対応していると考えられる。同様の言語事実は他にも多く²、語の意味は客観的な現実だと捉えるよりも、むしろ、人間にとっての主観的な現実、つまり「概念」であると考えたほうがより自然だと思われる。では、人間は現実世界をどのように捉え、どんなふうにその現実を概念化して語の意味にしていくのだろうか？

そのような概念化（語彙化）のメカニズムを分析する上で重要なのが、語の多義性の問題である。先程の（5）における run はその意味として心的な移動を表していると述べたが、通常のいわゆる「走る」という意味を表していると思われる場合とは文におけるふるまいが異なっている。

- (6) a. The car ran {fast/slowly} from Tokyo to Osaka.
b. *The highway runs {fast/slowly} from Tokyo to Osaka.

(河上 1996 : 16)

(6 a) にみられるように、いわゆる一般的な「走る」ことを意味する run は速さを描写する副詞と共起できるが、(6 b) のような本来は静的な状態である描写を心理的に動きのある表現として捉えた run は、速さの副詞とは共起しない。この2つの run のふるまいの違いは、両者の語彙的な意味に明らかに関連性がみられることから run という動詞の多義性を表しているといえる。だとすると、2つの run はそれぞれが異なる意味表示を持つというよりも、基本的な共通する意味表示を保持しており、そこには両者に共通する意味情報が何らかの形で記述されていると考えられる。(6) にみられるような統語表現上の違いは、その意味表示上における何らかの操作によりもたらされたと説明できるであろう。つまり、run の語彙的な意味表示を記述するためには、単純に「run=『走る』を意味する」と考えるのではなく、「私たち人間は、

人が走る動作のどんな部分をどのように抽出して概念として語彙化しているのか」を考慮して分析することが必要になってくるといえる。

このような「人が世界をどのように捉えているのか」という認知能力のメカニズムを、積極的に語の意味表示の分析に取り入れているのが Pustejovsky (1991, 1995) や小野 (2005) の分析である。これらの分析は、語の意味を「人が自然界から切り取った心的な記号」、つまり「概念」であると捉えており、その「概念」は生成的なレキシコンにおいて合成的に構成されるという文法モデルを提案している。その中心となる意味表示レベルが事象構造 (Event Structure) である。

事象構造は、主に語のアスペクトに関連する情報を体系化して記述するレベルである。英語の語形成にはアスペクト情報の変化をもたらす例が多く存在することから、語の意味生成としての語形成という動的なメカニズムを分析する上で、このアスペクト情報は非常に重要だといえる。また、事象構造における分析は、人間の認知能力における重要な特性である図 (Figure) と地 (Ground) の分化というプロセスを「事象における主要部の指定」という形で記述している点でも非常に興味深い。これはつまり、「人間が自然界をどのように捉えて言語化するか」という認知的な知覚のプロセスを、文法モデルの中に取り入れて記述しているということであり、事象構造での分析は「アスペクト情報」と「認知的な概念化における特性」という、語形成のメカニズムを説明するために重要な二つの要素を同じレベルで記述できるということになる。

こういった分析そのものの特性による利点のみならず、事象構造における分析は実際に多くの語彙的と思われる特性を規則的に記述することに成功しているように見える。次章では、具体的な分析を紹介することで、この事象構造における語の意味表示や認知的な際立ちとの関連が言語事実の分析において重要であることを指摘し、きわめて語彙的と思われる情報についても規則的に記述する可能性について考えたい。

2. 事象構造と認知的な際立ち

Pustejovsky (1991, 1995) では語のアスペク的な意味はいくつかの事象から構成される複雑な事象として記述されており、それらは独自の構造表示レベルをレキシコン内に持つと提案されている。これが事象構造であり、その事象構造における焦点の位置、つまり認知的な際立ちが、その語の統語構造を決定している。

- (7) a. Jane broke the window. (causative)
a'. The window broke. (unaccusative)
b. Jane killed Bill. (causative)
b'. *Bill killed. (unaccusative)

上の例に見られるように、break (壊す) と kill (殺す) はいずれも使役動詞として被動作主を内項とする他動詞構文をとることが可能である。しかし、break が非対格動詞として自動詞化できる一方で、kill は自動詞としての使用が不可能になる。Pustejovsky (1995) はこれを「事象構造における主要事象の指定があるかないか」の違いによるものと提案している。

Pustejovsky (1995) における break および kill のレキシコンにおける語彙表示は以下のようになっている。

(8) a. kill

ES= E₁=e₁ : process
E₂=e₂ : state
RESTR=<_α
HEAD=e₁
QUALIA= FORMAL=dead(e₂, y)
AGENTIVE=kill_act(e₁, x, y)

b. break

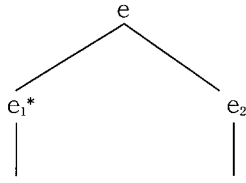
ES= E₁=e₁ : process
E₂=e₂ : state
RESTR=<_α
QUALIA= FORMAL=broken(e₂, y)
AGENTIVE=break_act(e₁, x, y)

(Pustejovsky 1995 : 80, 102)

両者の事象構造はほぼ共通しているが、kill の事象構造では主要部となる事象が指定されているところに違いがある。このため、kill の場合は事象構造を詳細な語義の指定を行う機能を持つクオリア構造 (Qualia Structure) と関連付けると以下のようなになる。

(9)

事象構造



クオリア構造

kill_act (e₁, x, y)

dead (e₂, y)



項構造

(x : SUBJ, y : OBJ)

shadowed

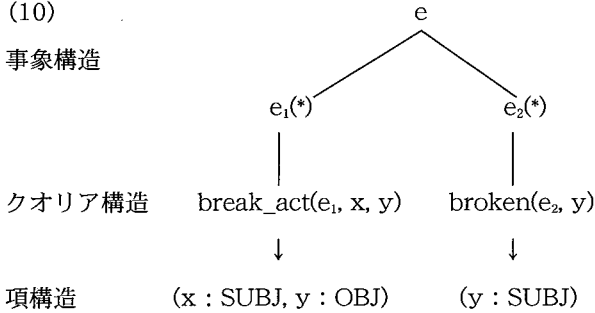
(Pustejovsky 1995 : 102)

(8a) および (9) において、kill はその事象構造として「過程 (process)」である e_1 が「状態 (state)」である e_2 に先行する「推移 (transition)」という複合的な事象を構成している。また、語彙的な指定としてこの複合事象構造の主要な事象が e_1 の process であるとされているため、事象構造上に主要部であることを示すマーカー*が記されている。クオリア構造はこれらの事象構造に詳細な語義となる意味情報 (概念構造) を与えるだけではなく、項構造を決定する機能も果たしており、Pustejovsky (1995) は、事象構造上において主要な事象と認められた事象と関連付けられたクオリア構造が統語構造へと投射されると提案している。つまり、(9) における kill の場合は、語彙的に常に先行する process の事象に参加する x, y が統語構造へと投射され、項として具現化することとなるのである。結果状態の事象となる state と関連付けられるクオリア構造は常に項構造には反映されない。そのため、(7b) のような結果状態の事象参加者である y のみが項として具現化する文構造は認められない。

これに対して、break はその事象構造に主要な事象の語彙的な指定がないため、以下のようにクオリア構造と結び付けられることとなる。

(10)

事象構造



(8b)、(10)において、breakはkill同様その事象構造として「過程 (process)」である e_1 が「状態 (state)」である e_2 に先行する「推移 (transition)」という複合的な事象を構成している。しかし、killには語彙的に主要な事象が指定されていたのに対して、breakにはそのような指定がない。このような主要事象の指定がない語においては、2つの事象が共に「内在的な主要事象 (potential heads)」(Pustejovsky 1995 : 74) として機能することになり、どちらの事象に話者の認知的な際立ちがあるかによって、結果として得られる文構造が変化することとなる。つまり、『壊れる』という結果状態をもたらした行為」に焦点をあてるか、『壊れた』という結果状態」そのものに焦点をあてるかで、統語構造として具現化する項が異なることになる。もし、結果状態に先行する行為に話者の焦点があるのであれば、事象構造においては先行する process の事象に主要部としてのマーカー*が与えられることになり、この事象と結びつくクオリア構造における事象参与者である x 、 y という2つの項が統語構造に投射される。これによって得られるのが (7a) の使役文構造である x break y の項構造である。また、行為ではなく、その結果得られた“壊れた”状態に話者の焦点があるのであれば、主要事象としてのマーカー*は結果状態である state の事象に与えられることとなり、統語構造には結果状態の事象参与者である y のみが投射される。したがって (7b) のような y break といった自動詞構文の項構造が可能になるのである。

このように、事象構造における主要部 (Headedness) の設定により統語構造におけるふるまいを記述した Pustejovsky (1995) の分析は、人の認知能力における特性を積極的に文法モデルに取り入れた分析といえる。人間は現実世界を知覚するとき、全てを同じように捉えているわけではない。必ず特に注意を向けて知覚する対象となる図 (figure) とその図に対して背景となる認知的な際立ちの低い対象である地 (ground) とに分けて世界を知覚している (大堀 2002)。このような知覚の仕組みから先ほどの break の例を考えてみると、事象の主要部が変化することにより統語的な項構造が変化することは「事象における認知的な際立ちが変化したことにより、統語的なふるまいが変化した」と説明することができるだろう。つまり、結果状態に先行する行為に人の注意が向けられ認知的な際立ちを得て「図」として知覚されれば、その行為における事象参加者が統語構造に具現化される。また、結果状態に人の注意が向けられ認知的な際立ちを得て「図」として知覚されることで逆に行為の方が「地」として背景化すれば、今度は行為における事象参加者も背景と化し、統語構造に具現化されるのは結果状態の事象参加者のみとなる。このように考えると、いわゆる語用論的な問題として分析されてきたような事象も、この使役構文における自他交替の有無と同種の問題として扱うことができる。

以下のような言語事実は、言語構造における図と地の区分を表す語用論的な問題としてよく紹介される。

- (11) a. 赤い車が山田さんの家の前にある。
a'. ? 山田さんの家が赤い車の前にある。
b. 佐藤さんが鈴木さんの前にいる。
b'. 鈴木さんが佐藤さんの前にいる。

上記の (11) の例において、統語構造は共通であるがその容認度には違いがある。(11b, b') の場合、2つの項である「佐藤さん」と「鈴木さん」を

交替することには何の問題もないが、(11a, a') においては「赤い車」と「山田さんの家」を交替すると容認度が大きく異なってしまう。Talmy の一連の研究ではこれを「位置関係を表すときは、図=主語、地=場所句という割り当てで文が構成される」(大堀 2002) ので、図になりにくい項が主語の位置に生ずると文の容認度が低くなってしまうと説明している。つまり、「赤い車」と「山田さんの家」とを知覚する場合、人は自然と空間の中で移動可能な対象である「赤い車」の方に注意を向けて知覚するため、「赤い車」に認知的な際立ちが与えられ、その結果動かない「山田さんの家」が背景と化すことになる。そのため、「赤い車」=図=主語、「山田さんの家」=「地」=場所句の形で統語化されるのが自然になるのである。しかしながら、(11a) は完全には非文とはならない。例えば山田さん家の場所がわからず探している人物に対して、「探している山田さんの家ならば、赤い車の手前にありますよ」と、「赤い車」を目印にして目的となる「山田さんの家」の場所を説明するような場合であれば、(11a) は可能な文となるだろう。これは、そのような特別な状況であれば、「赤い車」よりも「山田さんの家」に対して話者の認知的な際立ちが与えられているからである。つまり、人が何をどのように知覚しているかによって統語構造には何らかの影響が与えられると考えられる。「佐藤さん」と「鈴木さん」の場合は、潜在的にどちらも認知的な際立ちを与えられる「図」となる可能性があるので、発話の状況において、より注意を向けられている人物がその状況における「図」となり主語として具現化するといえるだろう。

この(11)にみられるいわゆる語用論的な問題は、伝統的な文法モデルの分析においては中心的な言語理論外の問題としてあまり重要視されてこなかった。しかし、事象構造での分析を通して使役動詞の自他交替という統語論と意味論のインターフェイスの問題が「認知的な際立ちの違い」によって生ずると考えるならば、(11) のような言語事実における認知的な知覚プロセスの特性は、動詞の自他交替のメカニズムを説明する上で大いに重要性を帯びてくると考えられる。なぜなら、この言語事実は、「人間が事象を知覚する際に、認

知的な際立ちが与えられやすい事象と与えられにくい事象が存在する」ことを示唆してくれているからである。

Pustejovsky (1995) の分析において、break と kill における自他交替の有無は「事象構造に主要事象の指定があるかないか」という語彙的な指定によるものだと説明されている。その事象構造から統語構造が導き出されるメカニズムは規則的だといえるが、「なぜ事象の主要部に対してそのような語彙的な指定が生ずるのか」という語が持つ慣用性の説明はされていない。もちろん、語のすべての側面が規則的に説明できるということは不可能だと思われるが、(11) の言語事実でみられた「認知的な際立ちを与えやすい対象と与えにくい対象がある」という知覚プロセスにおける特性を事象構造分析に取り入れていけば、break や kill における語彙的な事象主要部に対する指定も、単純に「語彙的に指定されているから」ではなく「認知的な際立ちを与えやすい事象と与えにくい事象がある」のだと説明できるかもしれない。

そもそも、規則性のみならず慣用性を持ち合わせているのが「語」であるならば、語形成やレキシコンの分析においては、動的なメカニズムのみならず静的な側面、つまり「どのようにして各語における慣用性が生み出されるのか」という部分の考察を試みることも非常に重要だといえる。break と kill の場合も、単純に「語彙的な指定として kill においては先行する行為に主要事象としてのマーカ―が与えられる」と言ってしまうと分析として明確ではあるが、「なぜ kill にはその指定があって break にはないのか？」ということを経験の認知能力と照らし合わせて考えると、「何かが壊れたときに『どの程度壊れた状態にあるか』という壊れた様子に認知的な際立ちを与える可能性はあるが、誰かが殺されたときに『どの程度死んだ状態にあるか』という死んだ様子に焦点をあてて認知することは人間の知覚のプロセスとして起こりにくい」というような人の知覚プロセスに関わる特性が原因で語彙的な指定が起こるという仮説をたてることも可能となるだろう。

もちろんこれはあくまでも一つの仮説であるが、いずれにせよ、「語（動詞）

の意味情報が文の基本構造を決定している」という前提の中でそのメカニズムを考えていくと、人間の認知的な知覚のプロセス、つまり、「人間はどのように世界を切り取り、どんな部分に認知的な際立ちを与えて記号化していくのか」という点を考慮することは大変重要であると思われる。次の章では、事象構造のレベルにおける接頭辞化の分析を通して、そういった人間の認知プロセスにおける特性を語形成分析に取り入れていく可能性を検討したい。

3. 事象構造における語形成

3. 1. 複雑事象合成としての語形成

英語には生産的な語形成を行う接頭辞として、un-、non-、de-、ex-、re-などがある。(中尾 2003) これらは多様な品詞の語彙に付加するが、そのできあがった派生語は接頭辞と語幹それぞれの合成的な意味を持つものが多く、非常に生産性の高い規則的な語形成の方法であるといえる。

これらの接頭辞化は時に項構造の変化をもたらすと指摘されている。

- (12) a. I thought that I would go out.
a'. *I rethought that I would go out.
b. I wrote her a letter.
b'. *I rewrote her a letter.
c. I reached the station early.
c'. *I overreached the station early.
d. I drank coffee.
d'. I *overdrank coffee.

(影山・由本 1997 : 54)

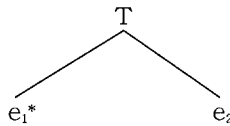
こういった統語的なふるまいの変化はなぜ起こるのか？この問題は「項構造の inheritance の問題」、「意味的・統語的な選択制限の変化」として長年議論の対象となってきたが、近年は語彙意味論的な立場から説明を試みる分析が多く提案されている。(影山・由本 1997、Yumoto 1997)

「語彙的な動詞の意味情報が統語構造を決定する」という語彙意味論の考えに基づけば、接頭辞化によって動詞の統語構造が変化した、ということは「接頭辞化により動詞の意味情報が変化したために、その新たな意味情報から得られた統語構造が変化した」ことに他ならない。つまり、接頭辞化は意味的に新たな動詞概念を合成することであり、その結果、統語的な項構造が変化したということは、動詞概念における項構造を導く意味情報が変化したと考えられることになる。

Pustejovsky (1995) の事象構造分析に従ってこのような動詞の下位範疇化変化をもたらす接頭辞化を分析すると、これは新たに生成された動詞概念において、その事象構造における認知的な際立ちが変化したことを反映しているのだといえる。これをモデル化したのが Aoyama (2004) であり、項構造における変化をもたらす生産的な接頭辞化を事象構造レベルでの複合的な事象合成 (complex event composition) として捉え、Pustejovsky (1995) のモデルをベースに接頭辞化された動詞が以下のような事象構造を持つと提案している。

(13) a. base-V

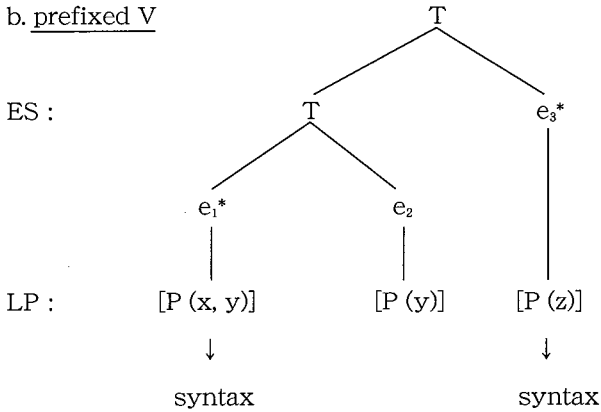
Event Structure (ES) :



Lexical Primitive (LP) :



b. prefixed V



(Aoyama 2004 : 114)

(13) は、事象構造として「transition (推移)」を持つ動詞に接頭辞化が起こった場合を示したものである。語彙的な意味表示のレベルにおいて、接頭辞は動詞と同様に事象構造を持つと仮定する。接頭辞が表す事象は主要部としてのマーカー*を保持して基体となる動詞の事象と複合的に合成される。接頭辞の示す事象は、ベースとなる動詞にとっては新たに付加される事象であり、新しく付加される意味 (事象) に認知的な際立ちが与えられるのは人の認知能力においてごく自然なことと考える。この主要部となる事象、つまり、認知的な際立ちを保持する事象における参加者が統語構造へと投射され、統語的な項として具現化することになる。ここで注意しておきたいのは、接頭辞化は形態的には動詞の前に接辞を付加する操作であるが、意味のレベルにおいては基体となる動詞の意味概念からのごく一般的な意味拡張のメカニズムとして捉えられるということである。次節では over-接頭辞を例に挙げて、このモデルをさらに詳しく紹介する。

3. 2. Over-接頭辞化の事象構造表示

Yumoto (1997) によれば、over-接頭辞によって派生される動詞は以下のような項構造変化をもたらす場合がある。

(14) <Vi (with a terminal event)→Vt>

a. overrun the line

a'. *run the line

<Vt→Vt(with the change in selectional features)>

b. overbuild {*houses/ the city}

b'. build houses in the city

<Vt(a change of state)→Vt>

c. overheat the room

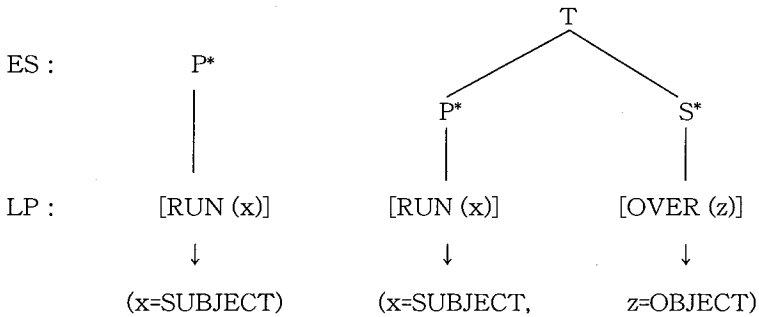
c'. heat the room

これらの例における意味的・統語的なふるまいを考慮すると、接頭辞 over-は語彙的な意味（クオリア）として [OVER(z)]、事象構造としては「状態 (State)」を持つと表記できる。その複合的な事象構造合成を表記すると、(14 a) については以下のような派生が考えられる。

(15)

a. run

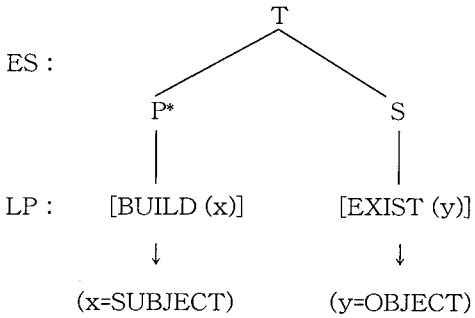
b. overrun



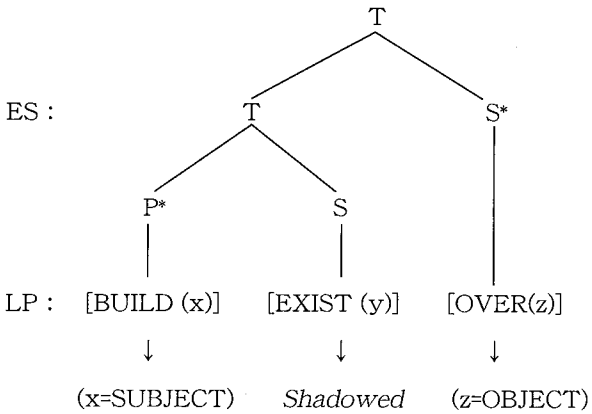
(15 a) のように、動詞 run は process という事象構造を持ち、その process 事象が単一事象であることから事象参加者の x を外項として統語構造に具現化する。接頭辞 over-が付加すると、over-の持つ state 事象が process 事象に複合することとなり、全体として transition 事象の複合的な事象構造へと変化する。これは事象構造における一般的な意味拡張の1つであるといえる。新たに加わった state 事象にも主要部マーカー*があることで事象参加者である z が統語構造に具現化することとなり、overrun においては直接目的語を取る文構造が可能になるのである。³

(14 b) および (14 c) の build や heat は Pustejovsky (1995) に従えば、transition の事象構造を持つと考えられる。両者の事象構造は、「process と state という二つの事象から複合的に構成されている」という点では共通しているが、その主要部に違いがある。作成動詞 build は先行する事象である process にその主要部としてのマーカー*が与えられるが、それに対して状態変化を表す動詞 heat は結果状態を示す state が主要事象になるのである。この主要部の違いにより、over-接頭辞化においては (14 b) (14 c) のような文構造における変化が生ずると思われる。

(16) a. build

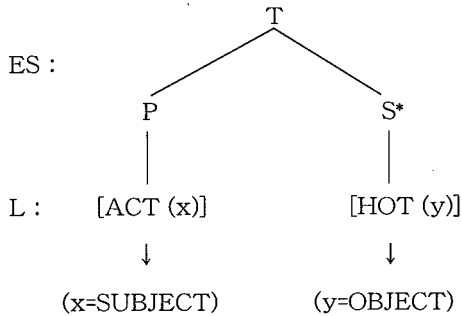


b. overbuild

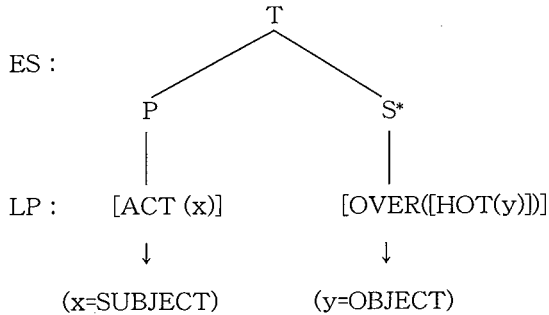


(16) は overbuild 派生における事象合成の記述を試みたものである。これに対して、overheat の事象合成は以下の通りになる。

(17) a. heat



b. overheat



まず、overbuild の派生は、overrun 同様、基体となる動詞 build の事象に over-の事象が複合的に合成する意味生成のメカニズムだと考えることができる。事象構造のレベルにおける記述は (16) のようになり、接頭辞 over-の事象構造である state 事象が、動詞 build の transition 事象と姉妹関係となる新たな transition 事象を構成すると仮定できる。新たに付加された接頭辞の state 事象は主要事象となるため、この事象の参与者である z が統語的に具現化され、結果的に (14 b) のような選択制限の変化が起こると思われる。これに対して (17) の overheat 派生においては、その項構造に変化が起こらないことから overbuild と同様の事象合成を想定することは考えにくく、

異なる意味生成のメカニズムを提案する必要がある。ここで重要になるのが、基体となる動詞 heat の事象構造における主要部は、結果状態の state 事象であるという点である。

「結果状態に認知的な際立ちが与えられている達成動詞」、つまり「事象構造が transition であり、かつその内部における state 事象が主要部となる動詞」に、さらに接頭辞の state 事象が加わるような意味生成を行った場合、その事象構造は以下のように記述できるだろう。

(18) [...P...& S₁*] S₂*

つまり、これは「process 事象が state₁ 事象を引き起こし、state₂ 事象へと変化した」という事象を表すこととなり、主要部のマーカーを持っていることから、時系列的に連続する2つの state 事象に認知的な際立ちが与えられることになってしまう。しかし、「ある状態が別の状態へと移行する」状況において、「移行前の状態」と「移行後の状態」の両方に認知的な焦点があたるということが、人間の知覚プロセスにおいて可能なのだろうか。むしろ、「状態が変化する様子を語彙化する際、変化前と変化後の両方に認知的な際立ちを与えることは、「図」と「地」の分化プロセス上、起こりにくい」と考えるほうが自然ではないだろうか。

そのような人間の認知能力における知覚プロセスの特性を分析に取り入れると、語形成の事象構造レベルにおける意味拡張プロセスには、「[...]P...& S₁*] S₂*]事象構造は不適格とする」というような事象主要部の設定に対する制約があると仮定できる。このため、overheat 派生においては overrun, overbuild 同様の意味生成が不可能であり、(17b)にあるように、heat の事象構造内にある state 事象とリンクする語義的な情報 (Lexical Primitive/クオリア構造に相当) の中に、接頭辞 over-の持つ語義的な情報が合成していくと思われる。

このように、事象構造というレベルで語形成を分析していくと、人間の認知

的な知覚プロセス、つまり「人間はどのように世界を捉え、どの部分を抽出して概念化していくか」という側面の重要性は明らかであり、語形成のメカニズムを記述する上で、大きな役割を果たしていると考えられる。その知覚プロセスにおける特性をどのように構造に反映させていくかについては更なる考察が必要だと思われるが、いずれにしても、人間が持つ認知能力における特性を積極的に言語分析に取り入れていくことで、語の持つ慣用的な側面と規則的な側面を同時に説明できる可能性は大きく広がるのではないだろうか。

4. まとめ

本論では、Pustejovsky (1995) の分析をベースにした Aoyama (2004) における複合事象構造合成としての接頭辞化分析を基に、語形成分析において認知的な知覚プロセスの特性、特に認知的な際立ちがどのようなメカニズムに基づいてなされているかを考慮することが重要であり有用であることを述べてきた。「事象をどのように捉えるか」という問題は、認知的な際立ちの他にも連続スキミング・要約スキミングのメカニズムといった認知能力における知覚プロセスの特性と深く関連しているとも考えられる。具体的に構造化するまでには至らなかったが、特に re-接頭辞化といった「ある事象を繰り返す」意味を示唆する語形成においてはスキミングのあり方が重要な意味を持つ可能性があり、全体的な文法モデルの中で語の意味をどのように構造化していくかという問題と共に今後の課題としていきたい。

注

1. *clearize の派生が不可能であるのは、clarify (明らかにする) という動詞がすでに存在して blocking となっているためという分析が可能である。
2. 大堀 (2002) ではこういった心的走査に加え、「穴がある」のような欠けていることを積極的に表現するいわゆる欠如詞などをあげて語の意味が客観

的な事実ではなく話者の構成した主観的な現実であると述べており、その立場を現実構成主義と呼んでいる。

3. この場合、transition は二重に主要部を保持する事象構造 (double-headed constructions) となるが、Pustejovsky (1995) はこのような二重主要部を保持する事象構造を持つ動詞の例として give や marryなどをあげている。(Pustejovsky 1995 : 73)

参考文献

- Aoyama, Chieko. 2004. Verbal prefixation as complex event composition. Bulletin of Shinshu Honan Junior College Vol.21, March 2004, 105-122.
- Chomsky, Noam. 1986. Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use. New York : Praeger.
- 伊藤たかね・杉岡洋子. 2002. 『語の仕組みと語形成』 研究社.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 影山太郎・由本陽子. 1997. 『語彙概念構造』 研究社出版.
- 河上誓作. 1996. 『認知言語学の基礎』 研究社出版.
- 中尾俊夫. 2003. 『変化する英語』 ひつじ書房.
- 大堀壽夫. 2002. 『認知言語学』 東京大学出版会.
- Pustejovsky, James. 1991. The syntax of event structure. Cognition 41, 47-81.
- _____. 1995. The generative lexicon. Cambridge, MA : MIT Press.
- Yumoto, Yoko. 1997. Verbal prefixation on the level of semantic structure. In Taro Kageyama ed., Verb semantics and syntactic structure, 177-204. Tokyo : Kuroshio Publishers.